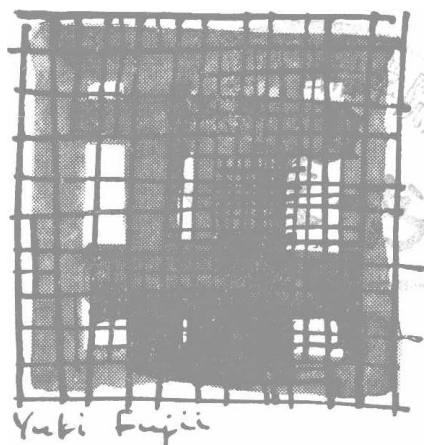


甘いホテル

多岐川 恭



Roman Books

著者の了
解により
検印廃止

昭和39年11月15日 第1刷発行

^{あま}
甘いホテル

著者 多岐川 恭

発行者 野間 省一

印刷所 豊国印刷株式会社
(大光堂製本)

発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽町3の19
振替 東京 3930
電話東京(942) 1111 (大代表)

¥ 320

© 多岐川 恭 一九六四

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

目次

直江コンサルタント	一〇
海辺の家	二三
二人の夜	三四
てい子の店	四七
襲われる	五九
開始	七三
萩原仙三	八四
虎の穴	九七
スパイ・竜平	一〇
定例閣議	二三
もう一人の死者	三五
杉と中根	四六

夢 想 家	一〇
アリバイ	一七
うまい犠牲	一五
内 村 里 平	一九
いやな男たち	二一
各 個 撃 破	二三
追 い 込 み	二六
完 全 占 領	二四
反 抗 開 始	二六
ス パ イ	二七
あ が き	二八
妥 協 工 作	二九
ラブ・シーン	三一
助 坊	三四
ボ ー ナ ス	三六

甘
い
ホ
テ
ル

直江コンサルタント

「ちょっと、あの顔見て」

と、五百垣紀子が言った。

「疲れ果てたって感じ。生活のアカをいっばいくつつけて……」

直江一良は、デスクの上に両脚をのっけて、眠りかけていた。窓から陽ざしが入って、直江の体半分をあたためている。紀子のところから見ると、張り出したアゴと、武骨など仏と、それから大きな鼻の穴が強調されている。

「自称イギリス風も、こうだらしくちや、サッパリだわ」

「先生は、たくましいじゃねえかよ」

と、牧竜平が言った。

「正義の味方って顔だぜ。悪くねえよ。紀公、きょうは生理日じゃねえか？」

五百垣紀子は、さっきから食べているチョコ・ビー

ナツを二つ三つかんで、牧竜平に投げつけた。

「直江コンサルタントだって。名前を変えたって一文にもなりやしないわ。先生のこの顔はね、何もするところがなくて、アメみたいに伸び切ってる男の顔よ。百年の恋だってさめちまうわ」

直江一良は急に鼻をヒクヒク動かし、何かつぶやいたが、こんどは軽いいびきをかき始めた。紀子はため息をつき、牧竜平の吹矢の練習を眺めだした。

牧は壁に的をつりさげ、手製の竹筒から矢を吹き出すことに没頭している。

「紀公の言う通りだ。こんどこそ、どうもついていねえな」

矢はみんな、わざとのように中心を避ける。

「よし、これが最後だ。当らなけりや、おれは退職して、ボン引きにでもなるか。組まねえか、紀公？」

最後の矢は、的の中心に突きささった。紀子は頬杖をついた。

「ボン引きになりそになったわね、かわいそうに」

直江一良が身動きを始め、まぶしそうに片目をあけた。

「よく眠ったぞ。静かな午後だった」

と直江は大あくびをした。

「先生、紀公がね……」

五百垣紀子は、すんなりした両腕を伸ばして髪にあってがい、最も魅惑的な微笑を直江に投げた。

「お目ざめ？ 安眠をさまたげないように、ずっと静かにしていましたのよ。吹矢なんかやって、うるさかったのは牧さんだけよ」

「女って、ケロッとしてうそをつくもんだな」

と、牧竜平は不平顔をした。

「でも先生、何か金もうけの依頼人が舞いこんでこねえかね？ 矢が……」

紀子の主張で取りつけたチャイムが、その時鳴った。牧がドアに飛んで行き、あけたとたん体にしがやちこばった。

「あたくし、あの……」

という女の声がした。直江一良は、隣りの寝室に駆けこんだ。五百垣紀子は取り澄ました秘書の姿勢になった。

牧竜平は、いくらかヘドモドしていた。ホテルのボーイのように、やけに右手を動かして、奥へ請じ入れている。

女は伏目がちに入ってきた。おとなしい、グリーン系統の中間色のスーツ。小粒真珠のネックレス、ジミな指輪。髪にはごく弱いウェーブがかかっている。

「直江さんにお会いしたかったですけど……」

女はそうつぶやくと、紀子にむかって、ていねいにお辞儀をした。

「先生はいらっしゃいます。少々お待ちください」

と、紀子はつとめて事務的に言った。女はかすかにうなずき、微笑した。三十にはなっていない。ほとんど化粧もしていないだろう。それほど白く清浄な肌の色だ。目と唇が美しいが、紀子は観察するのを省略した。

「先生は昼寝してたんで、すぐその……」

紀子は、そう言いだした牧竜平に、すごい白目をくれ、立ち上った。

「お呼びして参りますから」

直江一良は、寝室でヒゲを剃り終ったところだった。

「美人よ、先生」

「わかってる。それは足音でわかる。うまい紅茶を出しといてくれ」

「めるい出がらしをだしてやるわ。それで十分よ」

紀子はタオルを取って、直江に投げてやった。

「紀子を怒らせる程度の美人らしいな。牧の矢はまん真中に当たったと見える」

「先生が美人に当るってことは、問題じゃないの。問題はお金になるかどうかなんです。もっと現実的な」

りましょうよ先生」

直江は顔を拭き終り、悲しげな表情をした。

「ぼくは夢見る乙女が好きなんだがね、紀子」

「夢ならたくさん見ますわ。きのうは税務署に呼び出された夢を見たわ」

紀子は事務室に戻ると、お茶の用意をした。牧竜平は落着きなくウロウロしていた。女はめずらしそうに、デスクの上に置かれた吹矢の道具を見ている。

直江一良は、五分ばかりして、静かに寢室のドアをあけて出てきた。くすんだ色の、洗い服、明るい色のやや派手なネクタイ。

「お待ちせしました。直江一良です」

全部着替えたらしい。牧竜平が目を丸くした。

「あたくし、細谷てい子と申します。ご相談が……」

細谷てい子は、丸いなめらかな声を持っていた。

「うかがいましょう。その前に、ご紹介しましょう。

これが秘書の五百垣紀子です。これは助手で、牧竜平と申します。成年の生まれ、紀子は辰でございす。

気象として、よく合っています。ぼくの両腕ですから、同席させていただきます。……それから、当コン

サルタントの使命を、一応申しあげましょう。いや、これはテープに取ってございます」

牧竜平がテープをかけた。ゆっくり流れだしたの

は、直江一良の声である。

「当コンサルタントの使命は、ただ一つであります。

善良なる市民の、よき相談役となること、これです。政治は無責任であり、官僚は独善であり、財界

は横暴である。現代の世相は、善良なる小市民にとって、あまりにも詐謀に満ち、危険が到るところで待ち

伏せしております。そのなかにあって、善良なる市民は、自分自身のほかに頼るべきものもなく、防備なく

して戦場にさらされているようなものである。当コンサルタントは、彼等のためのよきパイロットとなり、

アドバイザーとなり、防壁となつて、人間の幸福追求の権利を十全に……」

「とめる」

と直江が言った。牧竜平はテープをとめた。

「まあ、そういったものです」

細谷てい子はニコリうなずいた。

「テープに取ってあると、手間が省けて、便利ですわね」

てい子は笑いをおさえているようだった。

「探偵社のようなことも、おやりになるんでしょうか？」

直江は上品に眉をひそめた。

「まずやりません。それは、ほかに人がありましょ

う。ぼくのほうの仕事は、もっと高度な、有意義なものですからね。夫を尾行してくれとか、結婚相手の素行を探ってくれとか、そういうご依頼ならば、大変残念ですが……」

紀子と牧が、非難の目を直江に向けたが、直江は無視した。

「いえ、そういうことではございませんの。実は、あたくしたちで、ホテルを作ろうと思っておりますんです」

直江一良は、二三度まばたきをし、美しい細谷てい子を見直した。

「ホテルを？ それはそれは。しかし、目下大きな観光ホテルが建築中だと思いましたがね。この小さな地方都会で、もう一つホテルを作ろうとおっしゃるんですか？」

てい子はつぶらな目を見張って、強くなずいた。

「もともと、小さくても一流のホテルを作ろうというのは、父の遺志でございました。申しおくれましたが、あたくしの父は、細谷弓雄と申しまして、参議院に出たこともございました」

「ああ、よく存じております。じゃあ、あの細谷さんの……」

直江一良はちょっと姿勢を正した。

「君たち、知ってるだろうな」

「知らねえね」

と牧童平が言い、紀子は黙ってそっけなく首を振った。直江はひどく鼻白んだ。

「もう少し、一般的な教養を身につけないと、仕事ができないぞ。……細谷弓雄氏は、当市出身の数少ない文化人の一人だ。細谷家は昔からの名門で、明治になってからは、代々貴族院議員だった。そうでしたね、お嬢さん」

「あたくし、結婚しております」

細谷てい子ははさかしそうに言った。

「あ、もちろん奥様だとは存じていましたが……」

直江一良は微笑した。

「幸福な御主人は、どういうお方でしょうか？ お差支えなければ……」

細谷てい子は、ふと顔を曇らせた。

「細谷直樹と申します。養子でございますが、いまは決まった職業というものがございません」

「と、申しますと？」

「結局、能なしなんでございましょう。人かよいばかりで……いままで、何か事業を計画しましては、悪い人にだまされて、ものになったのがございません。ちかごろは何か、発明をやっているようでございます

が、くわしくは存じません」

直江は深い同情の色を見せて、うなずいた。

「で、ザックバランに言いますと、奥様に養なわれていらっしゃる？」

「はい、まあ……あたくしがいま、陶器や骨董類をあつかっていますものですから、一応それで、生活だけはできております。子供もございませんし」

「ほう。ぼくもそういうものには興味がありません。一度おたずねしたいのですが……」

「こちらからも、お願いいたしますわ。ぜひ一度……」細谷てい子の目が、明るく輝やいた。紀子と牧竜平は、なんとなく目を見合せた。

「では、ご依頼の件をうかがいましょうか。どうぞ、お気軽な気持で」

と、直江は言った。牧竜平が、紀子の耳に口を寄せた。

「先生の鼻の下が、大分長くなってるぜ。いいのかい、紀公？」

紀子は、意地悪の母親が、そっと子供をつねる要領で、竜平の尻のあたりをつねった。

「あっ、いてっ！」

直江がギロリと目をむいた。

「どうしたんだ。失礼じゃないか」

「紀公のいたずらなんですね。イスに押しピンを置いてあったんだ」

紀子は何も言わず、涼しい顔をしていた。

「ふざけちゃいかん。二人とも、むこうへ行かせるぞ」

と直江は言ったが、紀子の視線へ直面すると、やましげに顔を反らせた。

「くだらないことを言うからよ。あたしは、お金になって、サラリーがもらえさえすればいいのよ。何さ」

と、紀子は竜平の耳もとでささやいた。

「どうも、ふざけることの好きな連中ではね。困ります」

直江一良は、もったいぶった声で失礼をわびた。

「おきれいな方ですわね。若くて、元気でいいわ。うらやましい……」

細谷てい子は、流し目で紀子と直江を見くらべた。

直江は夢見るような表情になり、牧竜平はブルッと体をふるわせた。紀子はかわいい唇をムッと結んだ。

細谷てい子の話を要約すると……

父の細谷弓雄氏は、政治に一度足を突込みはしたものの、もともと旧家の長男で、政治家向きではなく、本人も好きではなかった。

それに、さまざまな人間が、彼を利用しにかかるのがうるさいので、早々に政治から足を洗い、郷里であるこの藻崎市で、自適の生活を送った。

財産と言つては何もなく、ただ、海岸の景勝地に、昔から伝えられた広い敷地と、屋敷を持っているだけだった。

藻崎市に上品なホテルを建てたいというのが、細谷氏の老後の理想であつたが、これは、その敷地を使い、資金はすべて市民から集め、ホテル経営から生ずる利益を、外部の大資本などの介入を排して、市民だけで享受しようという狙いであつた。細谷氏としては、ほかに、学術上の貢献をするため、自然博物館、植物園なども作りたい意向だつたし、ホテル自体としては、いかがわしい小ホテル、旅館群が、あちこちに発生するきざしがあるので、品格のあるホテルによつて、それを駆逐し、藻崎市が、連れ込み客専門の温泉マーク町に墮落することを防ぎ、健康で学術的な保養地として発展させようという狙いだつた。

「賛成ですな」

と、直江一良は口をはさんだ。

「ぼくも同じようなことを考えていましたよ。静かな避暑地、保養地が少なすぎる……この藻崎市は、まだスレていませんし、海岸の保養地として、理想的なも

のになるでしょう。いいご着眼です。現在の時期を逸すると、あるいは俗化の一路をたどるでしょう」

直江は、しばらく瞑目した。

「いかがわしい温泉旅館、それを取り巻いて、雨後のタケノコのように生まれてくるバー、キャバレー、飲み屋、ヌードスタジオ、そして売春、毒々しい歓楽街……スポイルされてゆく町の娘たち……人間の弱さ、みにくさは、全く歎かわしいものです。ぜひ、いまのうちに救わねばなりません。藻崎市のために。それはぼくら、直江コンサルタントの使命でもあります」

「すぐくセンチになつたわよ。話を聞かないうちに、片肌どころか、両肌脱ぐ氣になつてゐるんだから、男って何ておめでたいんでしょうね」

と、紀子はまた牧童平にささやいた。

「なにが（歎かわしい）よ。歎かわしいのは、美人の依頼人に一口ロになつた直江一良じゃないの」

「とんがるなつてことよ」

と、牧童平が言い返した。

「金になりやいいんだろ？」

「そこで何をコソコソ言つとる」

直江一良は、不安そうに二人をにらみつけてから、細谷てい子に、やさしく話の続きをうながした。

「敷地は、おそらく、藻崎市の海辺で、一番いいところ

ろでございます。屋敷も古うございますが、洋式のいい建物で、ちょっと手を入れましたら、ホテルの別館として使えるはずでございます……」

……ホテル計画は、着々と進むように見えた。市長をはじめ、商工会議所、主な実業人が、趣旨に賛同して、協力を約束した。観光バスは、新ホテルの入口まで足を伸ばすと申し入れた。

計画が具体化する寸前に、細谷弓雄氏は倒れ、間もなく死んだ。運動のために、細谷氏はかなりの借金を残していた。

一人娘のてい子は、まず借金の整理から始めなければならなかった。未亡人のしげ子は、やはり旧家の出で、世の中のこと何一つ知らず、夫の直樹は甲斐性なしで、頼りにならない。

結局、てい子一人で一家を支え、切り回さなければならぬ破目になった。

山林、わずかな宅地と持家、それに昔から伝わった宝石、什器その他美術品を売って、やっと借金のカタをつけ、屋敷だけは売らずに済んだ。

てい子は陶器、骨董などを処分しながら、ブルブルとこの商売に入った。いまでは、取り扱っている商品のうち、自家のものはほとんどなくなり、名実共に古

美術商になった。一方、新しい陶器も仕入れて売るようになった。

もう一つ、店の一隅に上品なテイルームをこしらえたが、これは案外に当った。

生活は、夫の直樹が足をひっぱる以外には、まず安定したが、そうなると、再び亡父の夢、ホテル計画が浮かび上ってきたのだ。

てい子は、この計画は、あながち理想主義者の夢ではないと思った。採算がとれる可能性は十分にある。

てい子も、父の理想には共鳴していた。海辺の美しい、清潔なホテル……勤労者や、その家族も安心して泊れる、安い料金、そしていい設備、行き届いたサービス。それは、藻崎市の誇り、細谷家の誇りになりそうだった。地下の細谷弓雄氏も、安心して眠れる。

てい子は、生前の父が頼りにしていた、援助を約束した人々を歴訪した。

「みな、だめでしたわ」

細谷でてい子はさびしそうに微笑して言った。

「みなさん、口先では援助を約束なさいますが、それだけなんです。お金を貸そうとは言ってくださいません。観光バスの丸山さんにしても、バスの線をホテルまで伸ばしていただく約束だったのに、そのことは、忘れたようにおっしゃいません。ずいぶん父には世話